

## 『ロイヤル・セブンティーン』における イアンの話し言葉に関して

矢野 矢容衣

### はじめに

イギリスの有名な訛という、ロンドンの下町言葉であるコックニー訛 (Cockney) や上流階級の英語である容認発音 (RP: Received Pronunciation) が挙げられる。しかし、1980年代初頭にエスチュアリー・イングリッシュ (EE: Estuary English) の存在が発表されて以降、イギリスにおける EE の存在感は増し続けている。EE は、Cockney を基にイギリス南東部の訛や RP の要素も加味された訛である。イギリスにおけるこれまでの訛は地域的な訛と社会的な訛で構成されていたが、EE はそれらの垣根を越えた訛に成長し続けている。ロンドン大学のウェルズ教授 (J. C. Wells) は、「ロンドンの何百万もの若者はいつの日かクイーンズイングリッシュに取って代わるかもしれない発音で話し始めている<sup>(1)</sup>」と述べている。また、Trudgill (2002 pp. 176-177) は、著書の中で “The first is that RP is disappearing; the second is that RP is being replaced by a new, potentially non-regional accent.” と記している。これら二人の言語学者が指摘する新しい訛こそ、EE なのである。

本論文では、映画『ロイヤル・セブンティーン (英題名: *What a Girl Wants*)』に登場するイアン・ウォレス (Ian Wallace) の話す言葉に注目

し、その言葉がEEの影響下にあるのか否かを検討する。イアンは、ロンドンに住む若者という設定である。一般的に映画の中に登場する配役は、映画を見ている者に違和感を与えぬよう、その地に住む人々の特徴をつかんでいる。言葉にも同様のことが言えよう。言い換えれば、イアンの話し言葉を検討することによって、EEがどれほどロンドンの若者の間に普及しているかを観察することができる。

## 第1章 『ロイヤル・セブンティーン』について

『ロイヤル・セブンティーン』は、2003年にDennie Gordon監督によって製作された映画である。この映画は、William Douglas Homeによって書かれた“*The Reluctant Debutante*”という劇を基にして、1958年にVincent Minnelli監督が製作した映画“*The Reluctant Debutante*”のリメイクである。<sup>(2)</sup>

映画『ロイヤル・セブンティーン』は、ニューヨークに住むダフネ・レノルズ (Daphne Reynolds) が、出生以来一度も会った事のないイギリスの有名な政治家である実父、ヘンリー・ダッシュウッド (Henry Dashwood) に会いに行き、伝統に彩られた英国社交界で大騒動を起こしながらもデビューを果たすというストーリーである。ニューヨークを飛び出したダフネは、ロンドンでイアン・ウォレスに出会う。イアンはロンドンの下町で裕福とは言えない暮らしを送っているが、イアンの母は上流階級の出身であり、イアンもまた幼少時代パブリックスクールへ通っていたという設定である。

ダフネが初めてイアンと出会った Great Britain Grand Hotel は、イアンがスタッフとして働くホテルである。映画に登場するこのホテルは、実際には The Glove Tavern という名のパブである。その住所 (8 Bedale

Street, London SE1 9AL) からたどると、このホテルはロンドンの中心地からテムズ川を渡った対岸にある London Bridge 駅のすぐ近くに立地していることになる。<sup>(3)</sup> 加えて、映画の中で、イアンが帆船・カティーサーク (Cutty Sark) 近くの公衆電話からダフネに連絡を取るシーンがある。カティーサークが置かれているのは、ロンドン中心部から東に少し離れたグリニッジ地区 (Greenwich) である。これらのことから推測すると、イアンの生活範囲はホテルのあるサザーク地区 (Southwark) やグリニッジ地区などロンドン市内一帯であると考えられる。

イアンを演じた Oliver James についても触れておく必要がある。Oliver James は、Greater London (ロンドンを中心とする州) の南部に隣接する Surrey 州 Ottershaw の出身である。俳優としてデビューするまで Oliver は、Surrey 州の Guildford School of Acting で演技を学んでいた。<sup>(4)</sup> EE については後述するが、Surrey 州というのはまさに EE が発展した地域の一つである。

## 第2章 エスチュアリー・イングリッシュについて

エスチュアリー・イングリッシュを日本語訳すれば、「河口域英語」となる。「河口域」とはテムズ川 (The Thames) の河口を指す。<sup>(5)</sup> つまり、EE とは、テムズ川の河口域で話されている英語ということになる。この EE という名前は、1984年に *The Times Educational Supplement of 19 October* において David Rosewarne が造語として用いたことが始まりとされている。<sup>(6)</sup> McArthur (2002 p. 59 l. 36) は EE について、“This accent was not new, but had not been much discussed before this point.” と述べている。しかし現在では、EE はイギリスにおいて最も存在感がある訛として注目を浴びるようになった。このような EE の発達は、イギリスにおける地理

のおよび社会的要因の組み合わせによるものと考えられている。<sup>(7)</sup>

まず、地理的要因について記す。地理的要因を繙くと、EEの誕生に結びつく。EEが発達した背景には、ロンドン市民およびロンドン郊外の住民の移動が大きな影響をもたらしている。この移動というのは、2種類に分類される。一つは第二次世界大戦後の移住であり、もう一つは交通網の整備がもたらした通勤移動である。

第2次世界大戦後ロンドン市民が様々な理由で都心を離れ、エセックス、ケント、サリー、ハートフォードなど Home Counties と呼ばれる各州に移り住んだ。<sup>(8)</sup>その後、ロンドン周辺の町に移住したロンドン市民たちは、移り住んだ町で生活するために自分たちの訛である Cockney を修正した。そして、その結果、移り住んだ町の住民たちが話す訛りにも影響を与えることになった。<sup>(9)</sup>

Crystal (2003 p. 327) は、EEがさらに広範囲に広まった理由として、近年の高速道路と鉄道網の発展を挙げている。交通網が発達することにより、Hull, York, Leeds, Manchester, Liverpool, Bristol などの都市がロンドンへの通勤圏となった。広がった通勤圏は、ロンドンの訛を他地域へ持ち帰るといった結果を生んだ。Crystal (2003 p. 327 ll. 27-30) は、“the morning and evening transport routes to and from the capital carry many people who speak with an accent which shows the influence of their place of work.” と述べている。

次に、EEの発展に深く関わった社会的要因について述べる。EEが発展する社会的要因とは、RPを取り巻く社会の変化と言える。近年、イギリスにおける社会的地位は、いわゆる階級社会の崩壊によって、出身階級に捕らわれることが少なくなったとされる。以前は要職に就くために、自分の訛を上流階級が用いる RP に矯正する必要があった。しかしここ20年間、下層中流階級出身者が要職に就く機会が増えたことからも覗えるように、あえて RP に矯正する必要性が失われたのである。このこ

とについて Trudgill (2002) は、“the RP accent is no longer the necessary passport to employment of certain sorts that is once was.”<sup>(11)</sup>、“Even Conservative Party politicians no longer have to strive for RP accents, as a recent Conservative Prime Minister once did.”<sup>(12)</sup>と述べている。Crystal (1989 p. 64 ll. 30-31) は、RP は単に話者の受けた教育と社会的背景を語るだけで、もはや社会的エリートを保護するものではないと指摘している。

また、ヴィクトリア朝後期には地域的な訛は汚点とされており、地域的な差がないという理由でイギリスの BBC (British Broadcasting Corporation) が RP を採用した。しかし、近年になると、RP を採用してきた BBC でさえ、出身地域の訛を話すアナウンサーを数多く登場させるようになった<sup>(14)</sup>。このような RP を取り巻く環境の変化は、RP が持つイメージによるものも大きい。RP は ‘posh’ or ‘distant’ というイメージを聞き手に与える。一方、EE は、‘warm’ and ‘customer-friendly’ というイメージを聞き手に与える<sup>(15)</sup>。Cruttenden は、“Estuary English is said to be being adopted by those wishing to avoid the stigma of RP as ‘posh’ and by upwardly mobile speakers of local dialect.”<sup>(16)</sup>と述べている。このような RP を取り巻く環境変化の結果、中流階級に属する人がわざわざ RP に矯正する傾向は減り、そのまま EE を使う話し手が増えたのだと思われる。一方、RP 話者の中には、EE の要素を取り入れる傾向が見られるようになった。Crystal (1989 p. 65 ll. 36-37) は、EE の誕生について “various features of traditional London English (Cockney) have merged with RP or with local regional accent.”と記述している。また、寺澤 (2002 p. 229 ll. 20-23) は、EE について「一般的に河口域英語は容認発音とコックニーの中間として位置づけられている。社会的にも中立的な意義を持ち、そのため、『階級なき社会』の象徴的存在として捉えられることが多い」と述べている。

これまで述べてきたように、EE は地理的および社会的要因を経てイ

ングランド南東部で大きな影響力を持つようになった。加えて、今日のEEは、イングランド南東部のみならずイギリス全土においても影響力を持っている。地理的要因のなかで、交通網の発達により通勤圏が広がるに連れ、都市部の訛を居住地に持ち帰った結果、都市部の訛が郊外の町にも広がったと紹介した。しかし、これはロンドン周辺部だけの話ではない。実は、バーミンガム、リバプール、マンチェスターなど大都市近郊でも同様の現象が起きている<sup>(17)</sup>。ところが、ロンドン以外の都市部の訛は、EEのような影響力を持っていない。Trudgill (2002 p. 178) は、この違いを①EEが発達したイングランド南東部は、イングランドにおける人口が最も多い地域であり、②そのイングランド南東部というのは情報の発信地であるためとしている。

### 第3章 エスチュアリー・イングリッシュの発音

Trudgill (2002 p. 178 ll. 7-8) は、EEの発音について“Estuary English has obvious southeast of England features.”と述べている。また前述の通り、かつてロンドンに住んでいた人々の移動によってEEが発展したため、EEは多くのCockney要素を含んでいるとされる。

EEの発音上の主な特徴は、以下の通りである<sup>(18)</sup>。

(ア) frequent use of *ʔ* for syllable-final *t*.

(イ) vocalization of *l*, i.e. the use of a vowel or semivowel of the *o* type in place of a dark *l*, thus milk *mɪok*, table *ˈteɪb o*.

(ウ) use of *tʃ* and *dʒ* in place of *tj* and *dj*, thus tune *tʃu:n*, reduce *rrɪˈdʒu:s*.

(ア)は、*/t/*の代わりに声門閉鎖音 (Grottal stop) */ʔ/*を用いる */t/-glottalling*

である。声門閉鎖音は Cockney でも見られる特徴であるが、Cockney 話者の使用頻度に比べると、EE 話者はより少ない。例えば、“In Scotland the butter and the water are absolutely outstanding.”（下線部は RP 話者が /t/ と発音する箇所）という文において、EE 話者は Scotland の /t/ と outstanding の /t/ を声門閉鎖音に置き換える可能性がある。一方、Cockney 話者は、全て声門閉鎖音に置き換えるのである。加えて、Cockney 話者が母音間の /t/ を /ʔ/ と発音する（例：butter/'bʌtə/ → /'bʌʔə/）のに対し、EE 話者はこの条件で声門閉鎖音に置き換えない。EE 話者が声門閉鎖音で発音するのは、語尾または子音の前の /t/ である（例：Gatwick/'gætwɪk/ → /'gæʔwɪk/）。Cockney 話者もこの条件で声門閉鎖音を用いる。

(イ)は、/l/ を母音化する /l/-vocalisation のことである。これは dark /l/ を母音を用いて有声音化するものである。この特徴は、Cockney 話者にも見られる。

(ウ)は、Yod-coalescence であり、この特徴は Cockney の /j/ の脱落に由来する。Cockney の場合、/tj/ が /tʃ/ とならず、単に /t/ となる。そのため Cockney 話者が tune を発音した場合、/tu:n/ となる。

その他にも EE には、二重母音の性質など様々な特徴が挙げられるが、Cockney の特徴と共通するものが多い。しかしながら、Ulrike Altendorf の研究によると、Cockney と EE の境界を見極める上で TH fronting を判断材料とすることが有益であるとされる<sup>(20)</sup>。Cockney 話者は、th を /θ/ または /ð/ と発音するところを /f/、/v/ と発音する。しかし、EE は TH fronting を用いないことが Ulrike Altendorf の研究で分かっている。

Ulrike Altendorf がまとめた EE と Cockney の違いは、下表の通りである（表 1）。

表1 EE と Cockney の特徴<sup>(2)</sup>

Phonetic markers (Wells 1998)	Example	EE	Cockney
TH fronting	[ˈfɪŋk] for <i>think</i>	—	+
/t/-glottalling in intervocalic position	[ˈbʌʔə] for <i>butter</i>	—	+
/t/-glottalling finally etc.	[ˈgæʔwɪk] for <i>Gatwick</i>	+	+
vocalization of preconsonantal and prepausal /l/ ('dark /l/')	[ˈmiok] for <i>milk</i> [ˈpi:po] for <i>people</i>	+	+

#### 第4章 イアンの発音分析

表1を参考にして、イアンの言葉がEEであるか否かを分析する。なお、vocalization of preconsonantal and prepausal /l/ に該当しそうな単語の数が極めて少ないため、今回の分析では表1に載っている vocalization of preconsonantal and prepausal /l/ 以外の特徴について調べることにする。分析はDVD『ロイヤル・セブンティーン』を基<sup>(2)</sup>に行った。各表のChapterとは、DVDを再生する際のチャプターを示す。

##### ① TH fronting

はじめに、イアンの発話のうち、本来 /θ/ または /ð/ と発音されるべき単語を含む発言を下表にまとめた。下表の中で下線を引かれた箇所は、RP話者が /θ/ または /ð/ と発音するところを示す。

Chapter	イアンの発話
4	Come on, I'll show you around. So <u>the</u> kitchen's <u>through</u> <u>there</u> . Common room's down <u>the</u> hall. I should warn you, <u>the</u> dog and bone's on <u>the</u> blink and we've no lift here.
4	We better take <u>this</u> slowly.
5	Daphne, he's your <u>father</u> . You've flown halfway around <u>the</u> world to see him.



5	Yeah, well, you got a point <u>there</u> .
8	<u>This</u> is Ian Wallace.
9	All right, chill out, mate. You don't own <u>the</u> place.
14	Outside? On <u>the</u> terrace?
14	So let me guess. You'll disappear again <u>without</u> so much as a glass slipper?
14	It's not gonna liven up <u>this</u> party, <u>though</u> . Poor girls. I feel sorry for <u>them</u> . A dad like <u>this</u> will send <u>them</u> back to social Siberia.
14	Okay, <u>guys</u> . One, two, <u>three</u> , four!
16	I'm a musician. I was at <u>the</u> ball last night.
16	Eloping <u>together</u> ? Yeah. I realize it's a bit sudden, after last night, <u>there</u> really was no turning back.
17	Nice. <u>Thank</u> you.
17	Okay, <u>that's</u> it. Now gently slide your foot back.
17	So much for gently. Hold <u>this</u> . You gotta <u>think</u> grace. You gotta <u>think</u> poise. You gotta <u>think</u> balance. Observe.
17	Well, if you really want to know, believe it or not... my <u>mother</u> was a deb.
17	Yeah, and <u>then</u> she chose to marry <u>beneath</u> her. Her parents promptly disowned her. But for some reason <u>they</u> took pity on me, <u>their</u> half-breed grandson. <u>They</u> paid for me to go to <u>the</u> right schools. <u>They</u> got me into all <u>the</u> right clubs. Until one day I realized <u>the</u> hypocrisy of it all.
17	<u>They're</u> poor as church mice and <u>they're</u> <u>the</u> happiest people I know. Now, enough stalling. Get up <u>there</u> and let me see you perform.
17	Okay. Find your centre. Good. <u>That's</u> it. Okay. Now.
18	You better be. <u>There's</u> more reporters <u>than</u> usual.
18	What's <u>the</u> matter? Army, <u>Thought</u> our competition ended in lower school.
21	<u>That's</u> okay. I'll wait for you to get changed.
22	I don't want to hear about it, Daph. What happened to <u>the</u> old you? <u>The</u> real you? Okay, lads, let's pick up <u>the</u> tempo.
24	And now ladies and gentlemen, traditional <u>father</u> -daughter dance. Lord Dashwood?

DVDによる聞き取りを行った結果、すべての下線部においてTH

fronting は確認できなかった。

このことから TH fronting から判断する限り、イアンの訛は Cockney 訛の要素を含んでいるとは言えないことになる。

## ② /t/-glottalling in intervocalic position

次に、母音間に /t/ が含まれる単語を発言した箇所を下表にまとめた。下線部は母音に挟まれている /t/ を示す。

Chapter	イアンの発話
4	We <u>better</u> take this slowly.
14	It's not gonna liven up this party, though. Poor girls. I feel sorry for them. A dad like this will send them back to social Siberia.
17	So much for gently. Hold this. You <u>gotta</u> think grace. You <u>gotta</u> think poise. You <u>gotta</u> think balance. Observe.
17	Yeah, and then she chose to marry beneath her. Her parents promptly disowned her. But for some reason they took <u>pity</u> on me, their half-breed grandson.
18	You <u>better</u> be. There's more <u>reporters</u> than usual.
18	What's the <u>matter</u> ? Army, Thought our <u>competition</u> ended in lower school.
22	It's your <u>party</u> . You can do <u>whatever</u> you want.
24	And now ladies and gentlemen, traditional father-daugh <u>ter</u> dance. Lord Dashwood?

聞き取りの結果、ここでも TH fronting と同様に、母音間の /t/-glottalling が確認できなかった。母音間における /t/-glottalling は、EE にはない Cockney の特徴であるため、イアンの発音に母音間の /t/-glottalling が確認されなかったということは、少なくとも母音間の /t/-glottalling という観点から見ると、イアンの訛は Cockney 訛の特徴を有しているとは言えない。

## ③ /t/-glottalling finally etc.

最後に、標準的な発音において語尾または子音の前に /t/ が発音される単語を含む台詞を下表にまとめた。下線部は、語尾または子音の前の /t/ を示す。加えて、聞き取りの結果 /t/-glottalling が確認できた箇所を太字で示す。

Chapter	イアンの発話
4	Come on, I'll show you around. So the kitchen's through there. Common room's down the hall. I should warn you, the dog and bone's on the blink and we've no lift here.
5	Yeah, well, you got a point there.
9	No, I don't, but she's a friend of mine.
9	What?
9	All right, chill out, mate. You don't own the place.
14	Outside? On the terrace?
14	So let me guess. You'll disappear again without so much as a glass slipper?
14	Well, first of all, I could get fired. And second of all, I could get fired.
14	Okay, let's do it.
16	I'm a musician. I was at the ball last night.
16	Eloping together? Yeah. I realize it's a bit sudden, after last night, there really was no turning back.
17	Okay. So, what we need's a little cheering up, right?
17	Behave like what, exactly?
17	Okay, that's it. Now gently slide your foot back.
17	So much for gently. Hold this. You gotta think grace. You gotta think poise. You gotta think balance. Observe.
17	Well, if you really want to know, believe it or not... my mother was a deb.
17	Yeah, and then she chose to marry beneath her. Her parents promptly disowned her. But for some reason they took pity on me, their half-breed grandson. They paid for me to go to the right schools. They got me into all the right clubs. Until one day I realized the hypocrisy of it all.

17	They're poor as church mice and they're the happiest people I know. Now, enough stalling. <u>Get</u> up there and <u>let</u> me see you perform.
17	Okay. Find your <u>centre</u> . Good. That's <u>it</u> . Okay. Now.
17	You know what I still don't <u>get</u> ? Why are you trying so hard to <u>fit</u> in when you're born to stand <u>out</u> ?
18	What's the matter? Army, Thought our competition ended in lower school. Afraid she might <u>prefer</u> musicians to Cambridge boys?
21	That's okay. I'll <u>wait</u> for you to <u>get</u> changed.
21	Yeah, <u>but</u> ...
21	Cool. <u>Just</u> call me Daphne re-inhabits your body.
22	It's your party. You can do whatever you <u>want</u> .
22	I don't want to hear about <u>it</u> , Daph. What <u>happened</u> to the old you? The real you? Okay, lads, let's pick up the tempo.
24	And now ladies and gentlemen, traditional father-daughter dance. Lord Dashwood?
27	May I <u>cut</u> in?

上の表にある通り、イアンの発話の中で、語尾または子音の前の /t/ において、/t/-glottalling がいくつか確認できた。RP において語尾または子音の前に /t/ を発音する単語は、全部で63単語ある。これらの単語のうち /t/-glottalling が起きたのは18単語であった。つまり全体の28.5パーセントが /t/-glottalling したことになる。

#### ④ 分析結果

ここまで行った3つの特徴に関する分析結果を表1に付け加えると、次のようになる(表2)。

表2 EE および RP と調査結果

	EE	Cockney	イアン
TH fronting	—	+	—
/t/-glottalling in intervocalic position	—	+	—
/t/-glottalling finally etc.	+	+	+

表2を見て分かるように、イアンが話している言葉の特徴がEEに近いことが分かる。特に③ /ʌ/-glottalling finally etc. の分析では、イアンの発音において声門閉鎖音が現れる確率が28.5パーセントであったことに注目したい。Cockney 話者ならば全ての /ʌ/ を声門閉鎖音に置き換えるところであるが、イアンは3回に1回置き換える程度であった。語尾または子音前の /ʌ/ に関しては、非常にEEの特徴を表していると考えられる。

今回の分析では、調査対象となる単語数が少ないことや分析を行ったEEの特徴も3つに限定したため、明確にイアンがEEを話していると断言するに至らない。しかしながら、この分析結果から、少なくともイアンが話す英語は、Cockney よりもEEに近いと明言できるであろう。仮にイアンという配役がロンドンの若者の特徴を捉えているとするならば、現在のロンドンの若者たちは、かつて街中で使われていた Cockney ではなく、EEを使っている可能性が極めて高いと言えよう。

## 第5章 まとめ

今回の論文では、/ʌ/-glottalling と TH fronting を取り上げてイアンの話し言葉を分析した。その結果、イアンの話し言葉は Cockney ではなくEEである可能性が高いことが分かった。一方で、分析するにあたって、多岐にわたる特徴のごく一部しか用いることができなかつた点が今後の課題である。加えて、今回はEEとCockneyからの切り口でイアンの話し言葉に焦点を当ててみたが、イアンが話す言葉にはRPの影響も考えられるため、RPからの切り口も今後考えてみたい。

最後に、イギリスにおける訛の変化は、近年さらに加速しており、現在大きな影響力を持つEEが将来どのような地位に納まるのか興味が湧

くところである。ロンドンに居住する移民および外国人者数が増加傾向にある。これまでイギリスにおける訛は、イギリス人の中で変化してきたが、これからは移民および外国人によって新たな訛が発達する可能性がある。実際、2006年頃からジャマイカや西アフリカ出身者が話す英語から発展した Jafaican と名づけられた訛が、ポスト・エスチュアリー<sup>(23)(24)</sup>として注目され始めている。今後、イギリス国内における移民の割合がさらに増せば、RP や EE 以上に影響力を持つ訛が現れるかもしれない。

### 注

- (1) 中尾俊夫・日比谷潤子・服部範子（共著）『社会言語学概論——日本語と英語の例で学ぶ社会言語学』東京：くろしお出版、1997. p. 67 ll. 18-20.
- (2) <http://www.viewlondon.co.uk/films/what-a-girl-wants-film-review-4567.html/>
- (3) <http://www.london-se1.co.uk/restaurants/info/197/the-globe-tavern/>
- (4) <http://www.oliver-james.net/oliver.html/>
- (5) 寺澤芳雄（編）『英語学要語辞典』東京：研究社、2002. p. 229 ll. 8-10.
- (6) McArthur, Tom. *The Oxford Guide to World English*. Oxford University Press, 2002. p. 59 ll. 32-34.
- (7) 中尾俊夫・日比谷潤子・服部範子（共著）『社会言語学概論——日本語と英語の例で学ぶ社会言語学』東京：くろしお出版、1997. p. 69 ll. 12-13.
- (8) ———. Ibid. p. 69 ll. 13-15.
- (9) Crystal, David. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. (Second edition) Cambridge: Cambridge University Press, 2003. p. 327 ll. 40-45.
- (10) Trudgill, Peter. *The Dialects of England*. (Second edition) Oxford: Blackwell Publishers, 1999. p. 81 ll. 18-21.
- (11) Trudgill, Peter. *Sociolinguistic Variation and Change*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2002. p. 176 ll. 16-17.
- (12) ———. Ibid. p. 176 ll. 37-39.
- (13) Crystal, David. *The English Language*. Penguin Books, 1989. p. 65 ll. 18-19.
- (14) ———. Ibid. p. 65 ll. 21-22.
- (15) ———. Ibid. p. 67 ll. 22-24.
- (16) Cruttenden, Alan. *Gimson's Pronunciation of English*. (Sixth edition) revised, London: Arnold, 2001. p. 81 ll. 16-17.

- (17) Trudgill, Peter. *The Dialects of England. (Second edition)* Oxford: Blackwell Publishers, 1999. p. 81 ll. 29–30.
- (18) Wells, C. J. *Longman Pronunciation Dictionary*. London: Longman, 2000. xiii.
- (19) 中尾俊夫・日比谷潤子・服部範子（共著）『社会言語学概論——日本語と英語の例で学ぶ社会言語学』東京：くろしお出版、1997. p. 68 ll. 16–22.
- (20) <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/estuary/altendf.pdf>
- (21) <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/estuary/altendf.pdf>, p. 2.
- (22) DVD 『ロイヤル・セブンティーン』ワーナー・ホーム・ビデオ、2003.
- (23) <http://www.dailymail.co.uk/news/article-382734/jafaican-wiping-inner-city-English-accents.html/>
- (24) <http://www.independent.co.uk/news/uk/this-britain/jafaican-and-tikkiny-drown-out-the-east-ends-cockney-twang-473688.html/>

### 参考文献

- Cruttenden, Alan. *Gimson's Pronunciation of English. (Sixth edition)* revised, London: Arnold, 2001.
- Crystal, David. *The Cambridge Encyclopedia of The English Language. (Second edition)* Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Crystal, David. *The English Language*. Penguin Books, 1989.
- Fowler, W. H. and R. W. Burchfield. *The New Fowler's Modern English Usage. (Revised Third edition)* Oxford: Clarendon Press, 1998.
- McArthur, Tom. *The Oxford Guide to World English*. Oxford University Press, 2002.
- Roach, Peter. *English Phonetics and Phonology. (Third edition)* Cambridge: Cambridge University Press, 2000.
- Trudgill, Peter. *Sociolinguistic Variation and Change*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2002.
- Trudgill, Peter. *The Dialects of England. (Second edition)* Oxford: Blackwell Publishers, 1999.
- Wells, C. J. “Estuary English?!?.” *Sociolectal, chronolectal and regional aspects of pronunciation: Symposium in Lund 9 May 1998*.
- Wells, C. J. *Longman Pronunciation Dictionary*. London: Longman, 2000.
- Wells, C. J. <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/estuary>
- 荒木一雄・安井稔（編）『現代英文法辞典』東京：三省堂、1992.
- 中尾俊夫・日比谷潤子・服部範子（共著）『社会言語学概論——日本語と英

- 語の例で学ぶ社会言語学』東京：くろしお出版、1997.
- 古沢宏輔 「エスチュアリー= イングリッシュ (Estuary English) について」 『愛知学院大学人間文化研究所報』 第32号、2006年9月20日、7-8頁。
- 寺澤芳雄 (編) 『英語学要語辞典』 東京：研究社、2002.